

手と手をつないで

No.367

やまぐち ひろゆき
山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



再び、つながる！

ウィズコロナの時代にー

コロナ禍から一年、東日本大震災から十年を経た、この春ー

新年度がスタートしました。それだけに新型コロナウイルス感染に対する対策をとりつつ、地域・職場・サークルなどの活動を進めておられることと思います。

この春は、東日本大震災から10年の「節目」とマスクコミなどでよく口にされてきました。私たちは日々、報道される被害者や感染者の人数・割合などの情報を受け続ける中、感覚的に見えにくくなっている社会の具体的な事実はないかと問い返したくなります。

たしかに客観的な「数値」は状況把握のためになくてはならないものですが、そこに「節目」ということだけで気持ちの整理ができない一人一人の哀しみや暮らしの事実が厳存し、継続していることに思いを馳せられる自分でありたいと思います。

また災害やコロナ禍の中で、私たちが生きていくうえで本当に大切な、意味のあるものは何かについて、新たに

考えはじめた気持ちを周囲の人々とも重ね合わせていきたいと思っています。

高齢者は、子どもたちは、マイノリティは…

福岡県内においても、経済的な格差拡大とともに家庭内暴力や内輪暴力の



増加が深刻な状況となりました。孤独な暮らしをせまられる中で、外部とのつながりが持てないまま認知症が深刻化する高齢者も増えていきます。また、テレワークなどにより家庭で可能な労働内容が画期的に増加した半面、職場で人と対面できないまま過剰労働・体調不良・心身の疾患におちいる労働者

の実態もみえてきました。昨年春からマイノリティの人たちへの中傷や攻撃が増加する傾向もおさまってはいません。

このようにコロナ禍の時代をくぐる中で、新たに発生した社会問題や課題が数多くあります。そして、日本に以前から存在していた人権課題や私たちの中にある差別意識が、コロナ禍の状況のなかで新たにあぶり出され、浮き上がってきた側面もみえてきました。これからそれぞれの側面に目を向けて個人として、組織として何ができるかを考えていきたいと思っています。

新たなつながりを生み出す関係づくりを

私たちは今後、地域社会を単なるコロナ禍以前・震災以前の状況に戻すのではなく、コロナ禍の中で明確になってきた課題をみつめ、一人一人が大切にされる関係づくりを進めていきたいと思っています。

これまでに脈々と受け継がれてきた差別解消・人権文化拡張の歩みを再構築していく学びへとつながり、そして取り組みを今年もともに創り出していきます。